

# 夏目漱石研究を活用した教材研究

## — 「第三夜」(「夢十夜」)と「こんな晩」との比較 —

齊藤 歩実  
教科領域コース

### 1. はじめに

漱石が「私の個人主義」(1921年の講演)で主張した「自己本位」という視点は、「自己の立脚地を堅める」という点で学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の指針と一致する。現代においても、中学校では「坊っちゃん」、高等学校では「こころ」が掲載されているのは、生という問題について取上げられた作品であり、現代にも共通する個の在り方の難しさに向き合った作品だからである。「夢十夜」においてもその片鱗はうかがえる。特に「第三夜」では、自己の内面に潜む罪や宿命などが象徴的に書かれている作品である。これは、明治期における急激な近代化の中で、西洋の価値観が流入するとともに伝統的な東洋的価値観と交錯し、人間の精神的基盤が揺らいでいた時代の背景を反映していると見ることができる。また、「夢十夜」でいう「罪」は近代的自我の成立とともに生じた不安や葛藤を示しており、個の在り方の難しさを表したものになっている。そこで本報告書では、このような「坊っちゃん」「こころ」に共通する生という問題と個の在り方の難しさという視点を兼ね備えた「夢十夜」を教材として用いることで、生徒が近代文学における「生」や「個」の問題を主体的に捉え直し、自己と社会の関係を多面的な視点で捉える契機となる教育的可能性について別稿で検討した。なお、別稿においてはこの「夏目漱石研究—『第三夜』(「夢十夜」)と『こんな晩』との比較—」として論じ、本実践研究報告書はこの研究を基に検証した。

夏目漱石「夢十夜」(明治41年)は、夢に関する10篇の短編集からなる作品である。「夢」という場面設定から連想される現実とは異なる空間性や、背負っている子供によって見透かされる自分の過去、現在、未来といったような、超越された時間性は無気味さを醸しだし、異様な印象を与える要因と考えられる。「こんな晩」は百姓や農家の家に泊まった巡礼僧の六部(「日本廻国大乘妙典六十六部経聖」の略)が殺されて金を奪われてしまい、家として一時は繁栄するものの、後に報復が訪れるという、口承文学の中でも「因果応報譚」である。この話は、一定の様式を保ちながら各地域に広まったものであり、その地域の特定の事件や教訓と結びついて伝承されたものである。

この民話「こんな晩」と「夢十夜」「第三夜」の関係については、先行研究において良く触れられるものの、関係性の有無に関しては研究者ごとに解釈が分かれており、学説上いまだ統一の見解は得られていない。そこで、「夢十夜」「第三夜」と民話「こんな晩」の、2つの作品の構造を元に比較を行い、関係性の可能性を高めることを目的に研究を行った。

### 2. 研究内容

#### 2-1. 漱石と父親

本章では、漱石と父親の関係を軸に幼少期の諸体験や、それに伴う心情が後年の作品にいかなる影響を与えているのかについて論じた。

江藤淳（1970）の『漱石とその時代 第一部』では、漱石はあまり父からは望まれた子ではなかったという。漱石自身それには気がついていなかは不明であるが、少なくとも『硝子戸の中』を書いている時期にはそのことに気がついた。そして、漱石は生まれてすぐに夏目家から出される。漱石はこの塩原家に養子に出される前にも一度貧しい古道具屋に里子として出されており、この古道具屋では売り物と一緒に毎晩四谷の大通りの夜店にかごに乗せて曝されていたという。扱いに見かねた2番目の姉である房が連れて帰ったが、次は養子として塩原家に出される。

この塩原家の夫妻は漱石を大切に可愛がる反面、理想的な家族の形を作ることへの執着があった。その重圧に漱石は苦しむが、7歳になった頃に塩原家夫婦は破局し、再び夏目家に戻ることになる。

漱石自身、自分の人生のことを『硝子戸の中』において、「不愉快に充ちた人生をとぼとぼ辿りつつある私」と表現していることや、「今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明瞭に描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかった。私さえただ苦い顔をしたという結果だけしか自覚し得なかった」と評しており、このときの不遇な体験の記憶というのは漱石の心の底に、深く刻みつけたと考えられる。

呉敬（1995）の『『こころ』再考—〈親子関係〉を中心として—』では、「これから先自分はどうかという将来に対する不安を感じざるを得なかった幼少年期の漱石の惨めな心境は、想像にあまりある。こうした不幸な体験が漱石の「心の核」の形成に決定的な影響を及ぼし、幼い心に刻まれた父親に対する否定的な観念や、大人の世界への不信感が漱石の「心の核」に存在し続けて、無意識のうちに創作意識にはたらきかけたと思われる」と述べられているように、漱石の幼少期の記憶はその人格形成に関与するとともに、後の様々な作品の影にも影響を与え続けるのである。

授業で夏目漱石の諸作品を教材として扱う際には、内容に焦点を置いて授業が進められていくため、漱石自身については表層的な理解で終わることが多い。そのため、教材として学ぶ生徒は自分とはかけ離れた人という印象をもつ傾向にあるだろう。このような漱石の幼少期の体験を知ること、漱石を一人の人間として意識させ、生徒の興味・関心を惹きつける契機になると考えられる。

## 2-2. 「夢十夜」「第三夜」について

ここでは「夢十夜」「第三夜」に漂う無気味さについて、既存の研究史と仏教的観点に基づく「時間論」「空間論」を軸に考察を行なった。

「夢十夜」における「時間」は、現実世界の時間とは異なる異質な性格を帯びている。「第一夜」では「百年」待った末に一輪の花が咲くという描写があり、「第三夜」では百年前に自分が盲目を殺したという自覚が湧く。この百年は、現実世界においては大体人間の一生分の長さでもあり、長い時間の象徴でもある。そのため、「第一夜」「第三夜」ともに、夢でない限り生きていられない年月になっている。この「第三夜」を流れる時間に関して、亀井秀雄（1984）は「身体・この不思議なるものの文学」において、「メビウスの輪」と表現しているが、これらは循環する時間を示すものであると同時に、我々の世界に落とし込んだ理解のできる時間とも言える。しかし、この「第三夜」では小僧の発言から、人間の認識しうる範囲ではない、時間は存在するが過去も未来も現在もない時間というのが「第三夜」における時間であることが分かる。先行研究を踏まえた上で、「夢十夜」

「第三夜」において、「百年」が「永遠性」を象徴するものであると見るができる。ここで言う「永遠」というのは「無限」という意味での「永遠」ではなく、多数の連続的な時間が同時に存在し無限に時間が積み重なり合う空間、つまり「四次元的空間」と言うことができる。吉本隆明(1971)の『心的現象論』では、「感情」では〈知覚〉のばあい必須の条件とみなされる了解の時間性が消滅しなければならない。しかも、たんなる消滅ではなく空間化された時間、という変容として消滅しなければならない。〈感情〉はどんな遠隔の対象をも措定するが、この措定には、対象の空間性にくわえて、時間性の変容した空間性がサンドウィッチされるはずである。」と述べられている。これをもとに「第三夜」を見ると、「盲目殺し」の時間を変形させて過去からもってきた「小僧」が感情の役割を担っているとも見ることもできる。そして、この空間においては「時間を通る空間」ではなく、「空間化された時間」というのが場の設定としてあることが、この「小僧」によって分かるため、やはりこの「第三夜」の世界は「四次元的空間」であるということができるだろう。

### 2-3. 「第三夜」と「こんな晩」の比較

ここでは、民話「こんな晩」の物語構造を四段階に整理したうえで、その枠組みにもとづいて「夢十夜」の「第三夜」及び怪談「持田の百姓」の構造を分析した。さらに、これらの分析を通して、「こんな晩」と「第三夜」の構造的関係性について検討を行なった。

「こんな晩」は大きく四段の構造に分けることができ、①歓迎の段（六部が村を訪れてもてなされる部分）、②裏切りの段（金を奪うために六部のことを殺す）、③繁栄の段（六部を殺したお金で家が栄えたり、特別な思いをしたりする）、④報復の段（祟りや不幸といった六部を殺したことによる報いを受ける）の四段階によって話が進む。①歓迎の段では、この話の軸となる六部の紹介や家の人に声をかけて泊まることも多い。この部分では六部という外部からの侵入者が相手の領域に入る、つまり外から境界を越えて相手の範囲の内側に入ることを示しており、相手も思惑があるにしろいったんそれを受け止めて、快くもてなす。②裏切りの段では、快く受け入れたものの、六部を殺す場面である。この六部を殺すに至るまでにも流れは二通りあり、一つ目は「思惑があり迷うことなく相手を殺し金品を奪い取る」、二つ目は「六部を殺すきっかけがあり、欲が出て殺す」である。この二つに共通する部分としてはどちらも自身の「欲」のために相手を殺すという部分であるといえるだろう。③繁栄の段では、六部を殺して得たもので利益を得るのである。この利益を得るというのは一概にお金持ちになることではなく、六部を殺して得たもので「利益」を得て安定した生活や、家族に恵まれるといった要素と考えたほうがよいだろう。この利益は、最後に④報復の段では、殺した六部によって不利益を被ることであり、この不利益はただ得たものを失うのではなく、「得たもの」+「もとから持っていたもの」までなくなる場合が多い。「お前が俺を殺したのも、こんな晩だったな」という言葉は、この段の後半で使われることが多く、その言葉をきっかけに報復が始まるといった流れとなる。以上が「こんな晩」の文章的構造になる。

この構造を以て「夢十夜」「第三夜」との比較を行なうと、全体を通して④報復の段をより具体的に書いたものであり、最後の場面において②裏切りの段・④報復の段が書かれる。また、その背景として①の段が連想されるといった構造となっている。民話「こんな晩」では物語の中で因果律を成立させるに、②裏切りの段と④報復の段が必須の条件になっているが、演繹的に考えてみるとこの②裏切りの段と④報復の段が軸になっている民話であるともいうことができる。そして、この

「第三夜」では④報復の段を軸にはしているものの、順番を変えて②裏切りの段とその背景に①歓迎の段も提示されており、民話「こんな晩」の軸をしっかりと捉えた作品になっているといえる。

これらの研究を経たうえで、改めて漱石がこの民話・怪談を用いた意味を考えると、時代の変化への不安というが大きいと思われる、漱石は『三四郎』において明治後期の急速な近代化への不安や旧来の価値観と新思想の衝突について書き、『それから』では個人主義の台頭について、『こころ』では明治という時代の終焉や倫理の根柢の喪失について書くなど、時代の変化とともに必然的に起こる無秩序状態の世の中の不安を書いた作品が多いことが分かる。「夢十夜」においてもそれは同様であり、時代の変化に対する不安を、「夢」という形で直接的にかつ自由に書いた作品になっている。先行研究においてその関係性が既に認められている落語『真景累ヶ淵』では、近代化されてゆく社会への不安や廃れていく従来の日本の怪談の魅力を用いて、漱石は前近代の日本の魅力を改めて「夢十夜」で表現をしようとしたのではないだろうか。そしてそれらを、「社会との関係」や「空間や因果、時間など人間の持ちうる制限」を考慮したうえですべてから解放され、自由に描くことができる「夢」に託したのではないだろうか。このように考えると、「夢十夜」という作品は、漱石の過去や時代の変化、それに伴う人々の不安を一挙に反映した作品になっているといえることができる。

### 3. 「夢十夜」の教育的側面

前近代的な思想と西洋的な思想が混迷とした明治時代は、結果的に人々の精神的支柱を失わせ、路頭に迷わせた。そんな当時の様子を描いた漱石の作品は、日本からの視点だけではなく、西洋からの視点もあわせ持ち、客観的に近代化による精神の不安を文章の中に見出す。現代では、技術革新が加速度的に進展することで、それに伴って人々の価値観は更新される。しかし、その変化に適応できなければ、個人と社会の間には一定の溝が生じ、結果として明治時代と同様の疎外感や不安を抱えやすくなる。このような状況に対して、社会変動の中で揺れ動く人間の内面を描き出した漱石の作品は、現代における人間と社会との関係を再考する上で、重要な手がかりとなるだろう。とりわけ「夢十夜」は、日本文化に根ざした思考様式を理解し、文学や思想など複数の学問を関連付けて考える姿勢を育てる作品であると言えることができる。したがって、学校教育において本作品を扱うことは、学習者が多様な学問領域に関心を向けるきっかけとしての教育的意義を有するものと考えられる。

#### 【参考文献】

- ・江藤淳（1970）漱石とその時代 第一部. 新潮選書.
- ・小松和彦（1998）講座日本の民俗学 2 身体と心性の民俗. 雄山閣出版.
- ・小松和彦（1994）憑霊信仰論. 国宝社.
- ・明治大学大学院文学研究科（1995）『こころ』再考－〈親子関係〉を中心として－ 吳敬著. 文学研究論集, 第12号. 筑波大学比較・理論文学会. p230－p250.
- ・夏目金之助（1984）夏目漱石全集 第四巻. ちくま文庫.
- ・夏目金之助（1984）夏目漱石全集 第九巻. ちくま文庫.
- ・夏目金之助（1984）夏目漱石全集 第十二巻. ちくま文庫.
- ・坂本育雄（1996）近代文学作品論叢書6 夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅰ. 大空社.
- ・坂本育雄（1996）近代文学作品論叢書6 夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅱ. 大空社.
- ・坂本育雄（1996）近代文学作品論叢書6 夏目漱石『夢十夜』作品論集成Ⅲ. 大空社.
- ・関敬吾・野村純一・大島贗志（1980）『日本昔話大成』第11「資料篇」. 角川書店.
- ・吉本隆明（2022）心的現象論・本論. 文化科学高等研究院出版局.